言，その裁可（周弼没後）により萩藩医学校の西洋医学校としての骨格が完成したと，構想の全体像を提示する．読者は各章を通して，周弼の西洋医学導入への綿密な構築性と周到な戦略性に驚き，と同時に幕末長州に生きたひとりの先覚医家の高志に感銘し，必ずや充足した読後感を得るに違いない．

ところで本書には若干の誤解や疑問点が指摘できる．まず久坂玄機の生年（73頁）．著者は従来の文化10年説と文政3年説に与せず，「忠節事蹟」の文化3年説を採り，医学校都講に任命された嘉永2年は43才との新説を唱える．ただ残念ながらこれは無理がある．在坂玄機が秋本玄芝に与えた詩中に「看来たる廿九秋春を閲す」（『久坂天籟詩文稿』）と見え，生年は文政3年，都講役就任時は30才と確定する．次に坪井信友（二代信道）の説明に「父の門人であった京都の広瀬旭荘」（129頁）とあるが，旭荘は大坂に僑居し，信道門人でもない．また周弼の古医方への親近感が三田尻の越氏塾で徂徠学を学んだ点に関係しようと述べる（101～102頁）が，越氏塾入門は田中の推論に過ぎず，かつ督学の吉武江陽は折衷派に近いとされ，化政期に藩営教場で徂徠学が徹底されたかは未詳である．加えて資料の扱いにもやや難がある．著者は田中が「毛利公爵家記録」とした文書類の出典を逐一示しており，細部を忽せにせぬ姿勢には敬意を表する．しかし好意で付けた返点の過誤がままあり，また旧字体での統一を図った引用資料に新字体が混入する等も見られる．さらに『古谷道庵日乗』（80頁）と『周礼』（98頁）の引用書は適切ではあるまい．

尤も以上は評者の狷介なる性による重箱の隅つつき的産物であって，いわゆる瑕瑾に他ならず，決して本書の価値を大きく損ずるものではない．末尾の付表「萩出身のおもな蘭学者」はよく工夫されて勝手がよく，人名・事項の索引も充実しており，双方から恩恵を被ることは勿論である．本書の刊行は防長医史研究にとって久しぶりの朗報となった．今後は田中の『青木周弼』との併読が不可欠の著作となろう．青木周弼及び萩藩の医育研究に転機をもたらす好著の登場を心から喜び，その成果を高く評価したいと思う．

（亀田　一邦）

［雄松堂書店，〒160-0002 東京都新宿区坂町27，TEL. 03（3357）1446，2014年1月，A5判，304頁，4,500円＋税］

書籍紹介

家本誠一 著
『金匱要略　訳注』

本書の著者は，父親が薬剤師で漢方薬に囲まれて育ち，旧制千葉医科大学（現千葉大学医学部）卒業後，内科医院経営の側ら『傷寒論』，『金匱要略』といった東洋医学の古典を学んだ医師である．『金匱要略』を現代医学の言葉で読み替えており，東洋医学を現代の日本の医療の現場に役立てたいという強い意志が感じられる．思想史研究的な意味においては，難がないとは言い難いものの，東洋医学を現代の日本の医療の現場に役立てたい医療従事者にとっては格好の東洋医学入門書となろう．

内容

金匱要略序
金匱要略方論

金匱要略方論　巻上
　臓腑經絡先後病脉證 第一

痙濕暍病脉證 第二
百合狐惑陰陽毒病證治 第三
瘧病脉證并治 第四
中風歴節病脉證并治 第五
血痺虚勞病脉證并治 第六
肺痿肺癰欬嗽上氣病脉證治 第七
奔豚氣病脉證治 第八
胸痺心痛短氣病脉證治 第九
腹滿寒疝宿食病脉證治 第十

金匱要略方論　巻中
五臓風寒積聚病脉證并治 第十一
痰飲欬嗽病脉證并治 第十二
消渴小便利淋病脉證并治 第十三
水氣病脉證并治 第十四
黄疸病脉證并治 第十五
驚悸吐衄下血胸滿瘀血病脉證治 第十六
嘔吐噦下利病脉證治 第十七
瘡癰腸癰浸淫病脉證并治 第十八
趺蹶手指臂腫轉筋陰狐疝蚘蟲病脉證治 第十九

金匱要略方論　巻下
婦人妊娠病脉證并治 第二十
婦人産後病脉證治 第二十一
婦人雑病脉證并治 第二十二
雑療方 第二十三
禽獣魚蟲禁忌并治 第二十四
果實菜穀禁忌并治

あとがき

（松村　紀明）

［緑書房，〒103-0004 東京都中央区東日本橋2丁目8番3号東日本橋グリーンビル，TEL. 03（6833）0560，2013年7月，B5判，597頁，9,800円＋税］

小形利彦 著
『山形県初代県令三島通庸とその周辺　～来形一四〇年～』

「土木県令」とも言われ，後々まで影響を残す山形県のグランドデザインを創案した三島通庸の業績を辿っている．特に人脈に力点を置いている．医史学に関しては，済生館医学寮教頭のアルブレヒト・フォン・ローレッツの招聘について触れられている．同著者による『山形県済生館の洋学史的研究』（大風出版，2011）と合わせて読むことで，済生館の背景についての詳細な理解が得られるであろう．

内容

	はじめに	1
第一章	生い立ちにふれて	17
第二章	三島県令とエッセル	79
第三章	栗子山に隧道を掘れ	99
第四章	画家と写真師たち	186
第五章	三島県令と都市計画	229
	むすび	255

（澤井　　直）

［大風出版，〒990-2338 山形県山形市蔵王松ケ丘1丁目2-6，TEL. 023（689）1111，2013年4月，四六判，292頁，1,500円＋税］

獨協医科大学とちぎメディカルヒストリー編集委員会 編
『とちぎメディカルヒストリー』

平成24年に寺野彰会長の下で開催された第113回日本医史学会総会・学術大会の特別企画が発端となってまとめられた．栃木県の医療に関する様々な話題が簡潔に紹介されている．日光社参や足尾銅山鉱毒事件などの栃木県固有の問題への導入として有用であり，また種痘や感染症などに関する他地域との比較にも有益である．

内容

序文　14
特別寄稿　医学の歴史（酒井シヅ）　30
I　医療編
栃木の民間療法（日野原正）　44
医療にまつわる進行（柏村祐司）　64
坂東の大学と田代三喜・曲直瀬道三（菊池卓）　84
県内初の西洋医　齋藤玄昌とは（中野正人）　98
壬生町・石﨑家の医療史（石﨑道治）　114
種痘医北城諒斎と種痘医磯良三（大沼美雄）　126
種痘の普及と足利地方（菊池卓）　170
感染症と闘った医師たち（岡一雄）　198
「渡辺清絵日記」に見る医療・衛生（中野英男）　218
江戸幕府日光社参医療（本田幹彦）　234
栃木町に医学校の礎を築いた松岡勇記（内山謙治）　244
栃木県のコレラ騒動（大嶽浩良）　266
栃木県立足利病院の設立と閉鎖（菊池卓）　288
足尾銅山鉱毒事件と田中正造（寺野彰）　296
整形外科の父・田代義徳（菊池卓）　310
II　看護編
壬生養生局における看護人の発祥と当時の看護（加賀光寶）　338
近代看護の先駆者黒羽藩大関和（加賀光寶）　348
III　薬剤編
宇津権右衛門と秘薬宇津救命丸（宇津善行）　362
壬生藩士太田信義と太田胃散（松木宏道）　368
日光御種人参（竹松広美）　382
IV　歯科編
栃木県歯科事情（牟田紀一）　408
V　栃木県医療行政と医療団体の歴史
栃木県保健福祉部　416
一般社団法人　栃木県医師会　426
社団法人　栃木県歯科医師会　432
一般社団法人　栃木県薬剤師会　438
公益社団法人　栃木県看護協会　442
特別企画
獨協「医」の系譜（新宮譲治）　448
栃木県医療証年表　470

（澤井　直）

［獨協出版会，〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880，獨協メディカル倶楽部，TEL. 0282（86）3030，A5判，479頁，2,400円＋税］

石原　明 著
『漢方　中国医学の精華』

本書の原本は，昭和38年（1963）に中央公論社より刊行された石原明著『漢方』である．吉川弘文館は，「既刊の日本史関係書のなかから，研究の進展に今も寄与し続けているとともに，現在も広く読者に訴える力を有している良書を精選し」（刊行のことばより），順次定期的に「読みなおす日本史」シリーズとして刊行している．その一書として石原氏の『漢方』が刊行された．いま筆者の手元にある中央公論社刊行本は昭和52年発行のもので18版と記されており，本書が広く読まれていたことが知れる．

石原明氏は1924年に山梨県甲府市に生まれ，1945年に日本大学専門部医学科卒業，陸軍軍医候補生衛生曹長となり復員．1952年に医学博士，以降，横浜市立大学医学部医史学研究室室長，横浜市立大学教授，日本医史学会常任理事，日本東洋医学会理事，東亜医学協会評議員などを歴任した．1955年，31歳のときに医学書院より『医史学概説』を上梓．漢方医学史に造詣が深く多くの論著をなした．主な著書には前掲書のほか，『日本の医学』（至文堂，1959年），『漢方の秘密』（論争社，1961年），『現代漢方』（学習研究社，1964年），『医心方第二十八房内』（至文堂，1967年），『漢方名医のさじ加減』（健友社，1984年）などがある．研究の対象は広範囲にわたったが，中でも『黄帝内経太素』の研究には力を注ぎ独自の見解を示した．また古医書の蒐集家としても知られており，古書市場の裏話などを論じることもあった．

本書は中国古代の医学の起こりから始まり，現代に至るまでの長い漢方の歴史をカバーしている．例えば，第二章「中国医術のめばえ」においては，古代中国を三大文化圏に分け，中国医術の起こりを三系統に分けて論じる．すなわち，黄河文化圏では針灸がめばえ（『黄帝内経』），揚子江文化圏では本草学を中心に不老長寿が追求され（『神農本草経』），江南文化圏では湯液治療が行われた（『傷寒雑病論』）というものである．また本書では，漢方の歴史のみならず，漢方治療の理論や症状に応じた漢方処方の選び方，あるいは著効ある漢方処方50種について構成生薬と分量を記すなど，その内容は盛りだくさんである．これらが軽妙な筆致でまとめられ，読みやすい一書となっている．最後に付されている日本薬科大学学長の丁宗鐵氏による「『漢方　中国医学の精華』に寄せて」では，石原明氏の人物像がエピソードを交えて描かれており本書に花を添えている．

まえがき
第1章　漢方―この未知なるもの（「漢方」は日本製／漢方でも使う民間薬／「証」―漢方独特の概念／女性にだけ効く薬）
第2章　中国医術のめばえ（魔法から薬へ／「醫」という文字／針灸の発明―黄河文化圏1／陰陽五行説の迷路へ―黄河文化圏2／不老長寿への憧れ―揚子江文化圏／経験医術の結晶―江南文化圏／養生思想の発生）
第3章　医学としての発展（以下，細目は略す）
第4章　近代医学のそとで
第5章　伝統医学の現代化
第6章　日本における漢方
第7章　漢方治療の方法
第8章　漢方処方の選び方
付録　著効ある漢方処方五十種
『漢方　中国医学の精華』に寄せて…丁　宗鐵
地図　前漢時代の中国

（天野　陽介）

［吉川弘文館，〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2番8号，TEL. 03（3813）9151，2014年3月，四六判，232頁，2,200円＋税］